

神の選びと人の自由意思

1. 人が救われるためには、主イエスを信じるのが条件です（使徒 16：30～35）
 - (1) 30～32 節 ピリピの町の看守は収監されていたパウロとシラスに尋ねました。「救われるためには、何をしなければなりませんか」。ふたりは答えました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」。そして、ふたりは、彼とその家の者全部に主のことばを語りました。
 - (2) 33～34 節 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、むち打ちで受けた傷を洗って手当をしました。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けました。それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜びました。
 - (3) 35 節 これらの出来事はすべて、夜明けまでの間に起きました。
2. 信じることは、人の行いではありません（エペソ 2：8～9）
 - (1) 看守は「何をしなければなりませんか」と尋ねましたが、「信じる」ということは人の行いではありません。聖書は、信仰と行いとを明確に分けています。
 - (2) エペソ 2：8a「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」と訳されていますが、原文を直訳すると、「あなたがたは、恵みによって、信仰を通して救われたのです」となります。
 - (3) 「信仰によって」と訳すと、「信仰を用いて」というような意味に誤解されます。聖書は、信じるということは、行いとは別のものと教えています。エペソ 2：8b～9a は続きます。「それは（救いは）、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません」。
 - (4) 信じるということは、二つの段階があります。
 - ① 神に背を向けていた自分を神の方に向きを変える。
 - 自分の立ち位置は何も変わりません。何か善行をひとつでもするわけではありません。きよいことは何ひとつできない自分のありのまま、そのまま神の前に立つことです。
 - 聖書でいう「悔い改める」とか「立ち返る」というのは、このことを言います。行いを改めて善いことをすることではありません。
 - ピリピの看守は「救われるためには、何をしなければなりませんか」と尋ねたときに、神の方に向きを変えていました。
 - ② 神の約束を受け取る。
 - 神は愛をもって、私たちに救いの道を備えてくださいました。それをただ受け取るだけです。
 - ピリピの看守は、パウロとシラスが語る主のことばを聴いてそれを真実であると受け入れました。彼はこのとき、神の約束を受け取ったのです。
3. 救いは、神からの「賜物」（エペソ 2：8）です。もし、人の行いによるなら、それは報

酬（ロマ 6 : 23）です。しかし、救いは報酬ではなく、神からのプレゼントです。私には何の功績も働きもないのに、神が私を愛してくださり、受け入れてくださり、神の国に迎え、永遠のいのちをくださいます。これを聖書では「恵み」（エペソ 2 : 8）といいます。

4. なぜ、神は、人の行いや人の長所によらず、信じることを通して、救いを与えてくださるのでしょうか。エペソ 2 : 9b は続きます。「だれも誇ることのないためです」。
 - (1) 誇りは、罪の源です（エゼ 28 : 17、イザヤ 14 : 14、創 3 : 5）。
 - (2) 神の国は、自分を低くする者たちの国です（マタイ 18 : 3）
 - (3) 自分を誇る人は、神を尋ね求めません（詩 10 : 2~6）。
5. 生まれながらの人はすべて、神を求めようとしません（ロマ 3 : 11）から、誰かが宣べ伝えることが必要となります（ロマ 10 : 9~15）。
6. しかし、聴くすべての人がピリピの看守のように主のことばを受け入れるのでしょうか。そうではありません（ロマ 10 : 16）。人は自由意思を持っていて、拒む人と受け入れる人がいるからです。
7. ここで一つ疑問がわきます。神を求めようもしない人の中に、どうして受け入れる人がでるのでしょうか。ロマ 10 : 17 は続きます。「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことば（直訳すると「キリストのことば」）によるのです」。
 - (1) ギリシア語の「ことば」には、ロゴスとレーマがあります。ロゴスは言語、レーマは実際に語られたことば、発音されたことばです。この箇所でのキリストのことばは、キリストのレーマです。
 - (2) 人が宣教し、他の人がそれを聞きます。そのとき、実は、キリストが聞く人すべてに語っておられます（ロマ 10 : 18、マルコ 16 : 20）
 - (3) 聖霊なる神は、そのとき、罪とは、さばきとは、義とはどういうことか、聞く人の心に教えてくださいます（ヨハ 16 : 8）
8. 神の働きかけはさらに続きます。ロマ 11 : 7「選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです」。
 - (1) 神のことばを聞く人たちは、受け入れる人と拒む人に分かれます。人の側から見れば、人が自由意思で判断した結果です。同時に神の目からみると、受け入れた人は神が恵みをもって選んでいた人、拒んだ人は、かたくなにされた人です。
 - (2) 神の選びは、選ばれた人の行いや長所にはよりません（ロマ 11 : 5~6）
 - (3) 人の目から誰が選ばれているかどうかはわかりません。宣教は、すべての人に向けて行わねばなりません。また、前項の 7 番にあるように、神もまたすべての人に語りかけてくださいます。
 - (4) 神のことばを聞くとき、選ばれている人には、さらに神の働きかけがあります。聖書ではこれを「召す」（ロマ 8 : 30）と呼びます。平たく言えば「呼び出す」です。教会というのは、原語を直訳すると「召し出された者たちの集会」です。

- (5) 信者を指す用語は、「選ばれた者」(コロ 3 : 12、Ⅰテサ 1 : 4、Ⅱテモ 2 : 10、テト 1 : 1、Ⅰペテ 1 : 1、5 : 13) です。「キリスト者 (クリスチャン)」(使徒 11 : 26) というのは、教会の外部の人たちが、信者を指して言ったことばで、「何かというとキリスト、キリストという連中」という意味です。
- (6) 神の選びは、強制連行ではありません。神が私を特別に呼び出してくださる、それに私は自分の自由意思を働かせて応答し、呼び出しに応じるという関係です。
- (7) 神の選びは、恵みの選び(ロマ 11 : 5) であって、私に何か資格や長所が認められたからではありません。そして、私が自分の自由意思を働かせて神を信じるようになったといっても、神からの召しがあったからこそだとわかると、ますます自分には誇ることは何もない、とわかります。
9. 宣教において、神の選びと人の自由意思とは調和しています(使徒 13 : 44~48)。
- (1) 13 : 46 「あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです」
- (2) 13 : 48 「異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った」
- (3) 神から召し、すなわち特別の呼び出しがあることがわかる箇所は、次です(使徒 16 : 14) 「主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた」
10. 誰を選ぶかどうかは、完全に神の主権の中にあることです。選びの基準について啓示されているのは、Ⅰコリ 1 : 26~31 です。
- (1) この世の愚かな者、この世の弱い者を選びました。知恵ある者はずかしめるため、強い者はずかしめるために。(27 節)
- (2) この世の取るに足らない者や見下されている者を選びました。有るものをない者のようにするため、無に等しい者を選びました。(28 節)
- (3) これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。(29 節)
- (4) しかし、私たちは、神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。まさしく、「誇る者は主を誇れ」(エレ 9 : 23~24) と書いてあるとおりです。
- (5) エレ 9 : 24 にはこう書いてあります。「わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行う者である」。私たちは、神の選びが神の計画の中にあって公正であることを信頼します。

参考となる聖書箇所

1. 生まれながらの人は、自分の力では善を行うことも、神を求めることもできない。
 - (1) 人は神を求めない(ロマ 3 : 10~18)
 - (2) 人は善を行うことはできない(ロマ 7 : 18)
 - (3) 人は霊的真理を理解できない(Ⅰコリ 2 : 14)
 - (4) 人は目隠しをされていて福音に見向きもしない(Ⅱコリ 4 : 3~4)

- (5) 人は罪の中で、霊的に死んでいる（＝神から分離している）（エペ 2 : 1～3）
- (6) 人は汚れていて、良いわざに不適格である（テト 1 : 15～16）
- (7) 世全体は悪い者（サタン）の支配下にある（Ⅰヨハ 5 : 19）
- 2. 神は、救いを受ける者を、無条件に選ばれた。
 - (1) そのタイミング（エペ 1 : 4、Ⅱテサ 2 : 13）
 - (2) 信じることと選びの関係（使徒 13 : 48）
 - (3) 選びはその人の長所によらず（ロマ 9 : 6～24）
 - (4) 神の愛による（エペ 1 : 3～14）
 - (5) 小羊のいのちの書（黙 13 : 18、17 : 8）
 - (6) 信者を指す用語は、「クリスチャン」ではなく、「選ばれた者」（コロ 3 : 12、Ⅰテサ 1 : 4、Ⅱテモ 2 : 10、テト 1 : 1、Ⅰペテ 1 : 1、5 : 13）
- 3. メシアはすべての人のために死なれた。
 - (1) イスラエルのため（イザ 53 : 8、ヨハ 11 : 51、使徒 13 : 23、ガラ 2 : 20）
 - (2) 信者のため（マタ 20 : 28、26 : 28、ヨハ 10 : 15、15 : 13、17 : 2～24、使徒 20 : 28、ロマ 4 : 5、ガラ 3 : 13、エペ 1 : 3～7、エペ 5 : 25～27、Ⅱテモ 1 : 9、ヘブ 9 : 28、黙 13 : 6～8）
 - (3) 世全体のため（ヨハ 1 : 29、3 : 16～17、4 : 42、6 : 32～51、Ⅱコリ 5 : 19、Ⅰヨハ 2 : 2、4 : 4）
 - (4) すべての人のため（ルカ 19 : 10「失われた者たち」、ロマ 5 : 6「神なき者たち」、ロマ 5 : 6～8とⅠテモ 1 : 15「罪人のため」、Ⅱコリ 5 : 14～15、Ⅰテモ 2 : 4～6、4 : 10、テト 2 : 11、ヘブ 2 : 9、Ⅱペテ 3 : 9）
 - (5) 救いに関係する3つの用語のいずれもが、不信者にも使われる
 - ① 贖い・・・偽預言者や偽教師にも Ⅱペテ 2 : 1
 - ② なだめの供え物・・・Ⅰヨハ 2 : 2
 - ③ 和解・・・Ⅱコリ 5 : 18～20、コロ 1 : 20～22
- 4. 神はすべての人を招いておられる。その中で、選ばれた者には特別な招きの働きかけがある。
 - (1) すべての人に対して（マタ 11 : 28、22 : 14、マコ 16 : 15、ヨハ 7 : 37、黙 22 : 17）
 - (2) 選ばれた者に対して（ヨハ 1 : 13、6 : 37、使徒 13 : 48、16 : 14、ロマ 8 : 28～30、9 : 16、Ⅰコリ 1 : 9、23～24、ガラ 1 : 15、ピリ 2 : 13、Ⅰテサ 5 : 24、Ⅱテサ 2 : 14、Ⅱテモ 1 : 9、ヘブ 3 : 1、Ⅰペテ 2 : 9）
- 5. 一度救われた者は、決して救いを失わない。
 - (1) 救いは一時的なものではなく、永遠の救いである（ヘブ 5 : 9、9 : 12、13 : 20）
 - (2) 信者の罪は裁かれる。しかし、救いは失われない（Ⅰコリ 5 : 1～5、11 : 29～32）
 - (3) 神が選ばれたゆえに、決して捨てられない（ロマ 8 : 28～30、Ⅰコリ 1 : 8、エペ 1 : 4、11、12、ピリ 2 : 12～13、ヨハ 10 : 28～29）